



教育目標「気概にあふれ主体的に考え行動する生徒」

～小さな学校の大きな誇り～

花巻市立湯口中学校

校報 No.31

令和7年10月22日

文責：校長（菊池）

童心に帰る

10月17日（金）の2・3校時に、3年生は家庭科の授業の一環として、湯口保育園で「幼児ふれあい体験」を実施しました。目的は、「幼児とふれあう活動を通して幼児への関心を高め、かかわり方の工夫を学ぶ」でした。

3年生は、2グループに分かれて、それぞれ、絵本の読み聞かせや寸劇、じゃんけん列車、段ボールカーに幼児を載せて引っ張ってあげる遊びをしました。その後、全員が外に出て、思い思いに外遊びをしました。積極的に幼児と関わる人、幼児から誘われて遊ぶ人、自分が楽しんでいる人と様々でしたが、幼児の元気の良さにエネルギーをもらってきましたようでした。

3年生の皆さんは、どんな幼児だったのでしょうか？



全校で幣束をつくりました（1年生は3年生から教わりました）



株式会社佐々木工務店様（佐々木繁樹 代表）から幣串を寄贈していただきました。ありがとうございました。⇒



シンガク指導者 照井 諭 様が旧前田小学校に保管されていた幣串をお持ちくださいました。ありがとうございました。

ノーベル賞受賞者から学ぶ

ノーベル賞は、ダイナマイトの発明者として知られるスウェーデン出身のアルフレッド・ノーベルの遺言によって創設され、物理学、化学、生理学・医学、文学、平和及び経済学の「5分野＋1分野」で人類に対して大きな貢献をした人物に贈られる賞です。最初の授与はノーベル財団によって1901年に行われました。

日本人の受賞者は昨年までで、28人と1団体で、最初に受賞したのは、物理学賞を受賞した湯川秀樹（ゆかわ ひでき）さんになります。

そして今年、日本から2人の方がノーベル賞を授与されることとなりました。生理学・医学賞には大阪大の坂口志文（さかぐち しもん）特任教授（74）が、化学賞には京都大高等研究院の北川進（きたがわすすむ）特別教授（74）が選ばれました。（ちなみに、賞金は日本円で約1億7000万円だそうです。）2人の功績は、ここでは省略して、2人の研究を通じて学びたいことを皆さんにお伝えしたいと思います。

まず、2人に共通しているのは、「あるはずがない」「できるはずがない」と批判の声が多い中、自分を信じて、30年以上の年月をかけて地道な研究を重ねたことです。

坂口さんは若者へのメッセージとして「自分がやりたいことを続けていくうちに自分の世界がつくれ、社会とのつながりが見えてくる。サイエンスに限らずいろいろな分野の若い人に、自分の興味を追求していくことを期待したい」と語っています。

また、坂口さんの好きな言葉は幸運、鈍重、根気を意味する「運鈍根（うんどんこん）」。「成功するには、運の良さと図太い神経をもった粘り強さ、根気強さが必要だということ」。

一方、北川さんは若者へ「面白いことにチャレンジすること。できないんだろうとか、それは無理だろうと言われるようなことにチャレンジしていく。それを実現できた時の醍醐味というのはもう最高ですね。」と語っています。

そして、北川さんの大切にしている言葉は、2つあり、「勁草（けいそう）の心」と「無用之用」です。「勁草の心」とは、勁草とは、強風や雪にも耐える強い草のことで、「逆境や苦しい時でも自分の研究の説を曲げないという気持ちが表れているから。」とのこと。

「無用之用（むようのよう）」とは、「役に立たないように見えるものも、実は役に立つということ」つまり、無駄だと思われるものにこそ、真の価値や意味が隠されているという視点を提供します。

なお、受賞式は12月10日、スウェーデンのストックホルムで開かれます。